

佳作

悲劇の中にあつた感動

千葉県 安房高等学校一年 近藤 菜々美

大虐殺を生き延びたユダヤ人少年が語る、感動の実話と帯に記されている本が気になり、手にとって読んでみることにした。悲劇の出来事の中に「感動」などあるのだろうか、と考えながら読み進めた。本のタイトルは『シンドラーに救われた少年』。そこには、どれだけ想像しようとしても、想像することのできない世界があつた。悲しみ、絶望、苦しみ、恐怖、どの言葉を使っても、決して言い表すことなどできない。「シンドラーのリスト」、この言葉は知っていたが、その重みについては何も分かっていなかったと、この本を読み終えて思った。

人が生きていくうえで、一番大切なものは何か。仲間、家族、お金、仕事、どれもそうだろう。しかし私は、人間としての尊厳を失ったら、人として生きていくことはできないと思う。この本の主人公であるレイソン少年は、戦争が始まった時、十歳で「シンドラーのリスト」に載った最年少のユダヤ人の一人であつた。突然降りかかった悲劇は、恐ろしく、悲しく、とても少年一人の力で生

き延びることなどできなかっただろう。

ナチ党員だつたシンドラーは、彼を「凄腕の機械屋一家のひとり」「高度な訓練を受けた」「専門家」「かけがえない存在」として工場の労働者のリストに載せたのだ。英雄とは、「最悪の状況で、最善を為すごく普通の人間」のことだとレイソンは言っている。十歳の純粋な少年の目に映つたシンドラーはまさに英雄だつた。配給のスープの量を増やしてくれたり、夜勤から昼勤にシフトを変えてくれたりした。あの戦争の中で、雇つていたユダヤ人の一人ひとりが誰であるか知ろうとした。そして、ユダヤ人に対して人間らしい扱いをしていた。シンドラーは人間としての敬意を持って、ユダヤ人と接していたのだ。シンドラーが国家への反逆とみなされる危険を冒してまで、そのように行動したことに心を動かされた。千人以上ものユダヤ人の命を救い、そのことが彼らにその後も続く未来を与えたことに深く感動した。もちろん、憐れみや慈悲の心がそうさせたこともあるはずだろう。しかし、シンドラーの勇気の理由は、彼自身が人として存在する、自分が生きる意味そのものだったのでないか。人間としての尊厳を失くせば人でなくなる、人として生きていく意味がないに等しいのだ。

自分自身に置き換えて考えてみると、「最悪の状況で、最善を為すごく普通の人間」になれるだろうか。難しいことかもしれないが、大事なことは一つだけ。人として

の尊厳を失わないように、周りの人にもその心で接するだけでよいのだ。シンドラのリストは人が人であるために必要なものであった。それは、シンドラにとって。リストには、人の尊厳というとても重いものが詰まっていた。

レイソンの母は毎週金曜日に安息日のキャンドルを灯した。キャンドルの輝きのもとで祈る時には、自分自身の存在を肯定できた。ユダヤ人たちは、収容所でも、互いに敬意や礼儀を失わないように努め、礼拝を行ったり、劇を上演したり、コンサートを開いたりして、ゲットーという最悪の状況でも美しいものは存在することを示そうとした。自らの人間性を失わないようにするために。生き残るために全力を尽くし、人として、生きようとす

る彼らの姿を想像すると、涙があふれてくる。

戦争が終わり、レイソンが自由を取り戻したのは、今の私と同じ年頃である。明日のことどころか、一時間後、あるいは一秒後どうなるかさえない状況にいた彼は、戦後アメリカに渡り、「言葉もわからず、この先どうなるのか見当もつかなかったけれど、恐怖は全くなかった。心がひたすら高鳴っていた。長い年月を経て、初めて未来を夢見ることができた。」と言っている。私は今、高校一年生で、将来のことを真剣に考えなければならぬ時だ。幸運なことに私には、未来を夢見る環境が整っている。

この本は、大事なものを考えるきっかけを与えてくれた。自分の中にもきっと「英雄」が存在することを教えてくれた。今の平和な日本で暮らす私には、あっても気づけなかったものに。しかし、これから世界は大きく変わっていくかもしれない。争い、テロ、災害などの只中に自分が置かれるかもしれない。「最悪の状況」はいつ来るかもわからない。その時に、この本をとおして考えたこと、感じたことを思い出したい。「英雄」とは「ごく普通の人間」なのだ。どんな状況になっても、人間としての尊厳を失わずに生きていきたい。そして、心が動く経験もたくさんしたい。

この本の中には、確かに深い感動があった。人間としての尊厳を大切に人とかかわる時、そこには感動が生まれることを学んだ。きっと、たとえ最悪な状況でなくても。そう考えれば、私の周りには、毎日、小さな感動の芽が溢れているのだ。